

私は「崇仏敬神＝偶像崇拜」と断言している一方で、「宗教大好きは無宗教者」、「無宗教者であるが宗教大好き」である。

1. 私の無宗教の基本姿勢

神・仏・キは現実化力・実現力を持たないことから「崇仏敬神はすなわち偶像崇拜」「崇仏敬神＝偶像崇拜の等式成立」と断言している者である。つまり、私には「神願仏頼・願神頼仏（神に願い仏に頼ること）」は一片たりともない。がしかし、と言いながらも他方では、神社・仏閣、仏堂・社殿の神仏しん・ぶつが大好きである。二面性を持っている、コインの表裏と同じである。「敬神崇仏＝偶像崇拜」を左極とすれば、「神社・仏閣大好き」は揺り戻しの右極である、バランス化の自動発動である。もちろん大好きではあるが特別の思い込みや執拗な感情の入れ込みはない。何かの教派・宗派の胡散臭いえせ似非宗教者の言葉などは取るに足らずで問題外である。生身の人間が説く敬神崇仏は他を排撃する原理主義と表裏・紙一重の関係にあることから、某宗派に傾倒すればするほど、あらゆる「もの・こと」に対する思想信条が偏って行く、執着して行くこととなる、政治の党派も同じだ。いわば、一般的に矛盾・撞着すると思われる考え方は私の心では両立・同立・並立し何の問題もないのだ。日常の「もの・こと」に対する見方はこのとおりの癖なので何の問題も生じないのだ。これは、「陽中陰あり、陰中陽あり」（仏性と魔性の同居・交錯どうご）の為せる本性で如何ともし難いことである。

他方で神・仏・キは大好きと言うことについて、私は、神・仏・キに向かい忠誠心をそのまま傾けられるのは、天から垂れる神様の教え、天から垂れる仏様の教えが大好きということである。生身の人間の教説・言説N o nではない、神・仏・キの持つ至高の真善美の教えである。その心は、神道は八百万神の天地・大自然の大法則、極無限の自由の道——「随神の道（人の私心を加えない、人為的技巧のない神意本来の道）」と、仏様の「無量寿・無碍光の道（量り知れないほどの尊い命を存分に活かす道）」、キリスト様の博愛主義（人を裁くなかれ・新約聖書 マタイ7章1～5節）の永遠の教えには頭を垂れ平伏ひれすることが出来る。人間としての真理追求を促す教えであり、そのような量り知れない崇高偉大・至尊至貴なる神・仏かみ ほとけに対しては、敬懼（敬慎畏懼／敬い慎み畏み懼れる）敬仰の心を以って額づくものである。もしくは、教義・経典・戒律を有しない神道の徹底的に自然依拠の「アニミズム（人間以外の生物を含む、あらゆる木や石などの物の中や自然現象にもそれぞれの個性的な魂が宿っているという思想や信仰のこと）」や、逆に膨大な教義・経典・戒律を以って個人の心の有り方に迫って来る仏教の説く「草木国土悉皆成仏（アニミズムに類似、通底する）」の感性も大好きである。繰り返すが、今世の生身の職業宗教者（神職や僧職や聖職）がこのことを解説したからといって、もはや個人的見解が入ったもの、脚色された方便であって、人間臭の紛い物まがであって私には意味を持ち得ない、つまり、無視である。まとめて、私が対話したいのは真の神威仏光である、天が垂れると言ったが、その精神は私が誕生した時に与えられて来た良心・致良知に備わっているものだと自覚出来る、その自噴に素直に従うことにしている。したがって、今の神社本庁の日本神道とか、空海とか最澄とかそういう個別・特定の宗派に縛られる、傾倒するものではない。

2. 学びの素材

(1) 真言密教の教主「空海」の教え

名取芳彦・宮下真著「空海（永岡書店）を参考にする。

その1；P20、大師の論書『般若心経秘健』の中で「それ仏法遥かに非らず。心中にして即ち近し。真如外しんによほかに非らず。身を棄てて何いづくにか求めん。」直意訳は、仏の教えは遥か遠くにある訳ではない。それは心の中であって、極近いものなのだ。真理は外の世界にないのに、自分の身以外の何処に求めようというのか、と語っている。空海という仏性は私の内にあることは頷けるが、私にはその仏性に敵対・反駁する醜い魔性も同居している、端的に「仏魔同居ぶつまたどうご」と自称している。それでは仏性をより光るように磨くには何を以ってすればよいのか？

(2) 新渡戸稲造の著書「武士道」に学ぶ

原文は英語、何人か翻訳しているが、奈良本辰也訳（三笠書房）の本が最適である。私はもちろん通読した上で大雑把に要約する。

・・・総じて言えば、武士道は仏教・神道・儒教の長所を継承していながらも、義を中心にした勇・仁・礼・誠と名誉を格別に重んじるのはむしろ騎士道とも共通する処があり、そこにはキリスト教の良さにも通じるものがあると言う。ただし武士道にはキリスト教の大きな「愛」が欠けているかもしれないので、そこで武士道とキリスト教が包摂しあえば、もっとすばらしいものになるのではないかという論旨になっている。要するに日本人にはキリスト教に比肩ひけんしうる道徳の伝統があるということを強調している内容である。キリシタンの新渡戸がこのようなことを海外向けに執筆する気に至った動機については、序文に簡潔に述べられている、「ある時、ベルギーの法学者ラブレーとの会話のなかで、“日本に宗教教育がない？（とはどうして理解できない。）そんなことで、日本人はどのようにして子孫に道徳を授けているのか」と問われたことに即答出来なかったのである。しかし、良く考えると、そのような観念を吹き込んだのは武士道にあると思いついたというのである。・・・

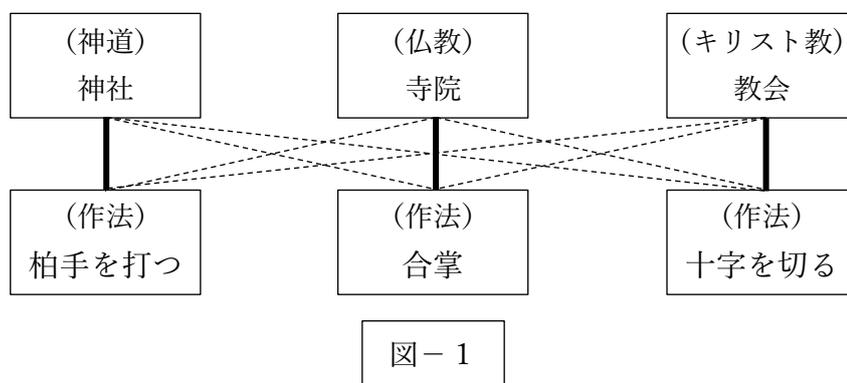
全文を圧倒的な情熱と祖国愛とキリスト教に対する確信を以って貫き、読む者を精神的に高揚させるに足る比類のない一書となっている。そのような武士道精神はすなわち大和魂である、とおっしゃられている。日本精神、すなわち武士道という大和魂は、仏教・神道・儒教やキリスト教の良さが溶け込んでいるという新渡戸稲造の捉え方である。かの著名な新渡戸が渾身の精魂を傾けて仕上げた日本人精神の分析である。私はこれを知ったのは遅く50歳代であるが、感激し一晩で読み通した。

(3) キリスト教への関心を深めた「日本二十六聖人」

もちろん私はクリスチャンではないが、キリスト教に興味を持ったことについてである。上記「武士道」に加えて「日本二十六聖人」物語である。歴史街道スルーハイクを思案している中で、「日本二十六聖人」のこと——「豊臣秀吉の禁教令に触れたため、外国人キリスト教宣教師6名と日本人キリシタン20名の計二十六名が、京都から長崎まで歩かされ、1597年2月5日、長崎は西坂で処刑された、殉教した。」という歴史的な事件があったことを初めて知った。日本で初めてのキリスト教信者の殉教という事件であった。その歩かされたルートに記載した本が販売されていることを知り、そのルートを実際に歩いて見た。——2018(平成30)年10月7日(日)～11月2日(金)26連泊27日間(総距離941km、純歩行距離910km)で徒歩スルーハイク敢行済(別記報告書作成済)——そんなことからキリスト教に関心が深まり、関連書籍を読む中で、ストーンと落ちて来た教えは「無償の愛と博愛の精神」である。どんな宗教にも共通する教えなのかもしれない。しかし、この地球上には、そのような崇高な教説を垂れながらセクハラ・パワハラ・公序良俗に違背する、悪事を働く聖職者(宗教者)が多数いる。だから私は、宗教・宗派を問わず宗教者を「胡散臭い権威主義4雑種(別記)」の中に入れていたのである。

3. 「雑混受容民族」のなせる業^{わざ}

日本人は「雑混受容民族」であることからまことに器用である。同じ一人の人生において、結婚式は教会で、生まれた子供のお祝いは神社で、死んだらお寺にお世話になる。その時の作法（所作）は、普通は図-1の縦実線の関係にあり、神社では柏手を打ち、寺院では合掌し、教会では十字を切る。四国霊場歩きへんろを4回行って来たが、寺院の前では般若心経読誦はもちろんのこと、神道方式の“二礼二拍手一礼”、さらには顔と胸の処で十字を切る作法を以ってキリスト教御言葉を唱える所作を行って来た。キリスト教会内部の祭壇に向き合った時は、十字を来た後に合掌し柏手を打った。これは私のシンクレティズム（後記）の成せる所以である。もちろん、生身の人間臭い神職・僧職・聖職の弁には全く関心はない。よって、総じて言えば、私は右から左までの思想信条がごちゃ混ぜであり、流動的であり、何かに偏頗・沈滞・停留することは私の最も嫌うところであることの証左である。共同体の有り様に迫って来る日本神道（神社神道）と、個人の心の有り様に迫って来る個人救済の仏教の、ある面では対立的にも見え



る全体性と個性を同時に受容し、上手に調和を図って北方民族である。

ところが、例えば、神社で十字を切る、あるいは寺院で柏手を打つ、あるいは教会で合掌する、とどうなるのか。各宗教施設側の担当者は強烈な違和感を覚え、人によっては「きつく注意！」となることだろう。ならば、私は「そのような所作は“だめだ”とは、憲法の何条に書いてあるのか？」と逆に責め立てたくなる。この3者の組合せでは図-1のように9通りの参拝作法があり得る。そこで、公的なイベント等において「神・仏・キ」の霊に尊崇の気持ちを表現する時には、差しさわりのないように一般的には「起立から礼のおじぎ」となる訳である。寺院でなぜ祓言葉やキリスト教の御言葉なのだ？と疑問を持たれると思うが、これは私のシンクレティズム——異なる複数の宗教的要素を習合して捉える考え方、諸教混濁方式を適切とする考え方——から来ている。元々私は神・仏・キは偶像、架空の世界であり「敬神崇仏＝偶像崇拜」であると断じているが、言い方を変えると、**崇高なる先の至深至奥な神・仏・キに境界はない、区別がない**と見ていることから、神・仏・キの精神は「全一」とであると認識しているからである。

そのような所作は、毎日、自宅の神・仏・キの祭壇に向かって行う勤行においても同様である。しかし、あくまでも、心の中は「崇仏敬神はすなわち偶像崇拜」「崇仏敬神＝偶像崇拜の等式成立」と断言していることから、**私の崇敬・崇拜・拝礼（崇仏敬神）の形は、いわゆる外形・外姿のみで体裁を整える形式に過ぎない。神社仏閣に向かい拝礼する時は目をつむるが、その時は、心の中にUターン・ブーメラン現象の動きが生じて、“今の自分はなあに？”という自問である。するとパツと浮かぶのが、“自分が自分が縛っていないか？ 自由か？”である。神仏に頼む、願う、すがる、利益を期待するというようなことはまったく浮かばない。**

学ある専門馬鹿はこのような私を支離滅裂、節操がないと馬鹿にするだろうが、私はそのように馬鹿に

されようが怒りは湧かない、あなた自身はたかが地球上 80 億人分の 1 ということを知らない・識らない・認知出来ない・分からない視野狭窄症（精神疾患）を患っていると逆襲・指摘する。

4. 私の信仰心の代弁

私が思う本当の信仰心とは、金銭財貨とは一切無関係で、損得勘定下心のない、かつ純粋な『真善美』を希求する自己対話の精神作用である。屁理屈はどうでもよい、神・仏・キに向き合う私の気持ちをあえて言うならば次の二つの素晴らしい和歌の心に籠っている。これ以上至純な信仰心はないだろう。これこそが吾が日本民族信仰心の神髄・精華なのである。若い頃から知っていた、私の誇張解釈を添える。

・西行の伊勢神宮参拝時の「**なにごとのおはしますかは知らねども かたじけなさに涙こぼるる**」

祀っているのは天照大御神とかいい究極至高の神様であろうが、そういう序列・優劣に関心がある訳ではない、言語では表現できぬ神々しさを感じる、私は仏教帰依（天台宗から真言宗へ？）の僧侶でもあるが、ここに来たら宗教宗派の何たるや関係ない、ただ有り難いと思ひ訳も無く涙がこぼれるのみなのだ。

・貞明皇后(大正天皇の皇后)の「**キリストも釈迦も孔子も敬ひて 拝む神の道ぞたふとき**」

日本人は外国から入って来たキリスト様・お釈迦様（仏）様・儒家聖賢の孔子様も客神と言って大事に受け入れ、仲良く共存共栄の世界を広めて来た。その違いを意に介せず皆を平らかに受け入れて来た精神は誠に大らかである。だから、家庭の中に神棚と仏壇を併存して祀り、子供が産まると神社のお宮参りに、キリスト教会で結婚式を挙げても、亡くなれば寺のお世話になる。当人のみならず親戚や知人・友人も礼儀を尽くして参列する。現世利益があるとかないとか、違いをことさら強調しない。日本人は全知全能のただ一つの神のみが存在する一神教世界ではないのだ。個性を持った八百万の神々と十方諸仏が仲良く暮らす国なのである。・・・

私は世のいかさま宗教者を「生臭坊主やイカサマ神主やデグスケ牧師にゴロツキ祈祷師」という言葉を以って揶揄するが、他人に向かって偉そうに説教する以前に、西行や貞明皇后のこのような崇高・高邁な精神を詠って見せよと言いたくなる。だから、神・僧・聖の職業は有りとしても、神職が仏・キの心に、僧職が神・キの心に、聖職が神・仏の心に寄せないとすれば、その職に値しないのだ。

5. 般若心経と双肩『四句の偈』

仏教の真髄は般若心経と称されるが、私は双肩を担うもう一つの御経は『四句の偈』と思っている。私のスルーハイク遊学紀行【後半、へんろトレイル】——2015(H27)年～2024(R6)年の10年間、全徒歩8,594 km——総てにおいて、頭に被った菅笠(図-2)に書かれている言葉のことである。それは仏教の宇宙観を表す僅か19文字の『四句の偈』である、神・仏・キに共通にし、かつ端的に表現した究極の教えが詰まっていると思っている。とてもとても大好きな偈(短い御経)である。



図-2

「めいごさんがいじょう 迷故三界城、ごこじっぽうくう 悟故十方空、ほんらいむとうざい 本来無東西、なんしょなんぼく 何処南北」

読み方は、「迷うが故に三界（欲界、色界、無色界）は城なり、悟るが故に十方は空なり、本来東も西もなく、いずこにか南北あらん」である。私の解釈は次のとおり。「・・・濃淡はあるものの人間は色々な煩惱、欲望に執着し、それが邪魔して無限大の可能性を秘めている人間を限定的、極小化している、それは自業自得の結果である、すなわち、お城の中に閉じ込められているも同然である、自由に身動きが取れない自縄自縛に嵌まっている。しかし、本来、人間には至純至高の自由が与えられているのだ。方角に東西南北というが、それは人間が決めたことに過ぎない、本来はそんな区別はないのだ。そう気付けば、真の自由を得た身となる、融通無碍、緩急自在、臨機応変の世界を獲得出来る、その先に発想豊かな想像力・創造性が開けて来るのだ。それが『無分別智』の世界なのだ。・・・」 極簡単には私も含めて“人間、みな、立派なこと・偉そうなことを言うが、虚実入り混じったもので怪しいものなのだ。”ということ、お互い様なのである。なお、同菅笠に書かれてある「同行二人」とは、歩くのは私一人であるが、精神的には一人だけではない、弘法大師様が一緒に歩いてくれるという意味で書き付けた語である。

仏教のみに係らず“神・仏・キに共通にして、かつ端的に表現した究極の教え”と既述したが、次の理由からである。この19文字は簡単に言うと、徹底して「こだわるな、こだわるな、こだわるな」である。「般若心経」の究極の教え「色不異空 空不異色 色即是空 空即是色」（執着するな!）と同じ内容だと理解している。これは仏教の言葉ですが、神職や聖職といえども煩惱執着の毒牙（独善）丸出しでは宗教者たる資格はない。

6. 「自助・共助・公助」と宗教の関係性

図(表)－3、「自助・共助・公助」と宗教の関係性を思い浮かんだ。誰かが言っただけではなく、近年、人と社会の係りについて「自助・共助・公助」が広く語られているが、私は次のように捉えている。この三つのキーワードが融合すればこそ住みやすい国家となる。私は、その3点に「一極二元の三律構造ワゴンセットなる「Moving oval man（動的楕円形人）」を組み合わせてみた。義務教育の道德においてこの3教を併存にして教えるべきものと思っている。生まれた時から年相応に「生老病死」四苦の混在混沌、同時進行で苦悶しながら死に向かい「自助・共助・公助」のバランスを求めつつ喘ぎながら生きて行くものだ。

静	仏教	自助	家族 自身	自助を育む原動力に「仏教」を当てたい、仏教は自己救済の宗教と謂われる。仏教を学ぶことによって自助が鼓舞される。自らの心の安寧は、自らの意志を以ってその神髄を探し求める他はない。「天は自ら助くる者を助く」の訓えに繋がる。
中	(日本神道) 神祇信仰	共助	(地域) コミュニティ	共助を育む原動力に「神祇信仰」を当てたい、神道を学ぶことによって共助の絆が深まる。吾が国古来の天神地祇を祀って来た吾が民族には、アニミズム観——動植物（生物）・無機物を問わない全てのものの中に靈魂が宿っているという考え方——が浸透しているが故に、神道は、コミュニティ融和、民衆の天下泰平や五穀豊穰等を本願とする。
動	キリスト教	公助	(行政)	公助を育む原動力に「キリスト教」を当てたい、キリスト教を学ぶことによって公助の意志が深まる。国民みな税金による社会セーフティネット構築は、人種や主義主張を超えた博愛主義や無償の奉仕という概念・思想に繋がる。

図(表)－3

私の「神・仏・キ」に向き合う基本は、いわば「神・仏・キ」ごちゃごちゃの精神世界を再現することにある。わざと・あえてごちゃごちゃの世界である、何の違和感もない。神道、仏教、キリスト教みなの教えが含蓄のある素晴らしい内容である。私が教えを乞うのは、「神・仏・キ」の理想精神である。地域コミュニティの何とか会の何とか長の胡散臭いたわごとなどは聞くに堪えない。“ごちゃごちゃ”に好感するのは、「雑混受容民族」たる大和民族の一人であり、自身がシンクレティズム (syncretism) —異なる文化の相互接触により多様な要素が混淆・重層化した思想—に思いを致す性格を有しているから何の違和感もためらいもない。私は、シンクレティズムなどと横文字を使っていい気になっているが、日本古来の修験道の修験者精神であり既存の宗教形態で区分け出来ない無宗教という信仰心を持った者ということでもある。私は実際に神社や寺院で拝む時、日常自宅の祭壇に向かっている時は、理屈は湧いて来ない、その一時は形式的にただ無心に手を合わせ、拍手を打つだけである、私の所作は至って形式的なのである。私の神・仏・キとの向き合いは、この身の奥底に潜んで対極している^(1人)仏性 (良心) と^(もう1人)魔性 (邪心) の対峙の舞台を作ることにある、つまり、仏魔両者の対話を促す動機付け、トリガー引寄せの手段である。あくまでも自己の内心における2人対話・一人QAの所作である。

7. 私が定義する真の宗教者とは

その1；人間は、地球上に80億人もいて、自分は77億分の1の小さな存在なのだという謙虚さをすっかり忘れて、80億人のトップにあるような錯覚を抱く悪弊を有している、だから個人レベルにおいても対立や戦争は永久に止まらないのだ。謙虚さを忘れるというのは我執——オレ我オレ我でがんじがらめになっているからである。我執とは、平易に言えば「こだわり、とらわれ、先入観」である。我執とは価値基準が自分の利害損得勘定のみであり、他人を思いやるとか共助とかは本心にはない、あるように見せ掛けている体^{てい}を言う。このような我執の「とらわれ」から解放されなくして、仏教の僧職のみならず、神道の神職やキリスト教の聖職者と^{いえど}雖も心の自由は得られない。よって、真の自由を得ていない者が、仏陀の、神様の、キリスト様の代弁者にはなり得ない。肩書は宗教者であるが、その実、心は我田引水の独善では色眼鏡をかけたペテン師も同然である。真の自由・完全自由に到達した理想的な人間などはないと開き直るだろうが、私の言うのは、宗教者としてそういう理想的な人になりたい、そういう人になるべきだと深く認識し、理想を目指して日々最大限の精進努力をしているかという問いかけなのである。偏った思想信条を以って、他人、すなわちマイクロコスモス (小宇宙) の人間を善導出来るのか、出来るはずがない。表層を飾り付け美辞麗句を並べて説教する胡散臭い人からは、臭い・汚い悪臭が漏れるから私はピーンと来る、後は馬鹿にして内心は嘲笑し放り投げの態度を取っている。

その2；キリスト教の中で感動する一説は「人を裁くなかれ」(新約聖書 マタイ7章1~5節) である。我執を張って他人に優劣を付ける言動はまさしく「他人を裁いている」姿勢 (性格) である。私とあなたは、比較・照合して優劣を競う関係ではないだろう、あるいは強弱の判定を行う対象物ではないのだ、私とあなたは違って当たり前なのだとということについて、有言実行を以って説論出来る人格者に宗教者としての存在価値がある。自宗を独善化し、他の宗教を批判・否定するなどは、どんなへ理屈を振り回そうが、宗教者に値しない。他人の前で偉そうな説教を振り撒く資格はない。ましてや、犯罪者に転落するなどはとるに足らずである。こういうことを理解し実践すれば、「こだわり、とらわれ」から自然解放されるのである、そのような考え方の一面を私は「対等互敬 (恵)」という。「対等互敬 (恵)」の世界には、「こだわり、とらわれ」と表裏一体を為す我執や独善の^{かけら}欠片は入り込む余地はない。「対等互敬

(恵)」の場においては、生身の人間が私我を以って偉そうに説く宗教とか宗派とかや、自惚れ説教を受け入れる余地はまったくない。

今でも、アレフや統一教会等の新興宗教に係る社会問題は根絶されないが、『崇仏敬神＝偶像崇拜』であることを、幼児教育、義務教育、青少年教育、社会教育において啓発・啓蒙を図って行く必要がある。

私の根本にある思想信条、宗教心は「天は自ら助くる者を助く」である。

(end)